

～輝きの子育て～

「国を守る」ということ。

新しく入園された園児と保護者の皆さんおめでとうございます。樹齢、約60年の庭の桜は満開を迎え新入園児、進級児の皆さんを歓迎してくれました。

この「輝きの子育て」は、園長の父（元サラリーマン）と母（お母さん先生）とが一月交替で執筆しています。その時々感じたことや子育てに参考になることを保護者の皆さんを対象に書いています。

今月は通常ですと、新入園児向けに「朝食の必要性」や「あいさつなどの躰」が書かれます。

しかし、今回は「ロシアによるウクライナ侵攻」という大きな出来事が発生しました。そこで日本人として考えなければならないことを書かせて頂きます。世界の景色を一変させるような出来事でした。

ウクライナは、いつ殺されてもおかしくないゼレンスキー大統領の指揮のもと、主として男たちが戦い、女性や子供たちを地続きの周辺に避難させています。

大統領の戦い抜く姿勢は微動だにもしません。アフガニスタンでは、早々と大統領が逃げてしまったのとは対照的です。「リーダーとは戦うものだ」と国と運命を共にする覚悟を世界に示しました。国を愛するとは、命を懸けて守るものだと示しました。国民は当然、大統領に従い戦っています。ウクライナ兵の士気の高さで小さな軍事力であっても、侵略者に立ち向かっています。

これこそが、日本人の心に刻むべき姿でしょう。国を守るとは、こういうことだったと思い出す、あるいは知ることです。日本人は、第二次世界大戦の敗戦で戦うことを忘れてしまったように思えます。そのような国は、世界は生きのびさせてくれません。米国は「自分の国を守らない政権を守る必要はない」とアフガニスタンから撤退しました。撤退の賛否はありましたが…。

日本は海を隔てて、核保有国のロシア、北朝鮮、中国、米国と国境を接しています。米国を除いては専制独裁者が治める国です。戦争は国境を接している国と行われるのが通常です。

特に専制独裁国家が、自国の目的、欲望を達成しようとした時に、それに立ち向うには外交的話し合いでは不可能だと目覚めなければなりません。今回の件を見ても国連は何の役にも立ちません。普通に考えれば、相手を怯ませるためには十分な軍事力を持つしかないと思います。それには、国民全員が国を守る心を育み、国防の準備を急ぐ必要があると考えます。ドイツ、オーストラリアは今回の侵攻を見て、すぐさま軍備の増強に動き出しました。

しかし乍ら、この侵略戦争を目の当りにしても、日本では防衛費の増額、核共有などの抑止力向上の議論が進まない状況です。安全保障の現実から目をそむけずに、国民を守る覚悟を持って欲しいと思います。

戦争は残酷ですから、誰も望みません。しかし、侵略された時、侵略者に屈服し、相手の思うがままにされるという選択肢はあります。

この平和主義には私は反対です。米国に対し「もう、お世話になりません。我々も自立します。」と言える日が早く来ることを願っています。

日本は戦後長い間、国防を考えてこなかったと思います。国防とか軍事というのは考えなくてよいというのが国の方針であったように思えてなりません。

今回のウクライナの問題を真剣に捉えて、日本が戦火に見舞われない為の論議を早くする必要があると思います。

片野 英司

※今回は、新聞、雑誌、識者とよばれる人、歴史学者などの人の話をメモにしたものを資料として執筆しました。